

に、せきを切つて流れ出しました。遺族の方々のみ知る突然の悲哀ではないかと思ひます。後日、図書館の地下室へ荷物をとりに行きました折藥品や、非常袋や、メチャ／＼でしたので、わからなくなりましたが、故内野先生の奥様より非常袋に先生の数々の研究の結果が納めてあつたと聞き、「貴女も近くに居て保管すべきだつたのに」と、言われ、全く気が付かずに済まない事をしたと、今だに後悔しています。

アノ日から十年目の夏です。私はお蔭様で、又大学に勤めさせて頂いてますので、毎日毎日を多忙の中に暮して居ります。時折斎藤先生の二人の御子様、奥様は、又、教室に居られた方々の御家族様はいかゞお過ぎだろうかと思つております。二度とこうしたおそろしい事がありません様にあわせて、故人の冥福を祈つて居ります。

(附属病院外来患者係勤務)

細菌学教室

当時の教室員は内藤達男教授の下に、三谷秀夫助手、葉国慶、山田英子両助手が研究に従事し、尙其の他に雇の原ルイ子、深井光子、教室補助の井上公人、定夫の渡辺直道、傭人として糸柳源太郎の諸氏が勤務して居た。

被爆時の状況

内藤教授は三谷助手、山田助手外二名と共に教室で被爆され、内藤教授、三谷助手は爆死、山田助手は片淵の下宿に辿り着いて死亡。他の教室員も教室で被爆し、深井、渡辺の両氏は死亡す。

故内藤達男教授略歴

正四位勲四等医学博士 細菌学教授

明治三十年九月一日徳島県に生る

大正十二年六月京都帝国大学医学部卒業

同 十五年一月同大学助手に任ぜられ細菌学を専攻す

昭和五年四月同大学助教授に任ぜらる

同 七年六月長崎医科大学教授に任ぜらる

同 十年三月細菌学研究のため欧米に留学、翌十一年十一月帰朝す

昭和十七年七月満洲国及中華民国に出張を命ぜらる

昭和十八年一月陞敎高等官一等

昭和二十年八月九日大学内に於て原子爆弾に遭ひ死す

主なる研究題目

抗原並びに抗体分析の立場よりみた感染及び免疫機序

死亡者の官職並びに氏名

官職	氏名
教授	内藤達男
助手	三谷秀夫
副手	山田英子
雇	深井光子
定夫	渡辺直道
"	川口某

当時の思い出

青木義勇

現在の皮膚科に風研片峯研究室が同居しているように、当時助教授の私が主宰する東亜風土病研究所病理部細菌学科は細菌学教室内にあった。細菌学教室主任恩師内藤達男教授は、あの日、三谷秀夫助手、山田英子副手、外二名の方と共に殉職された。もつとも山田女史は崩壊した建物の下から脱出し全身の負傷火傷を押して山を越え片淵町の下宿に辿着いて後死去された。教室の高橋庄四郎助教授は永い応召の末に福岡市外水城の西部軍管区防疫部に転属、そこに私とその年の四月赤紙を受けて入隊し、相共に生残つたというわけである。

原爆後の長崎に下痢患者多発、その原因調査という当時としてはもつともな命令を受け、この青木見習士官が数名の衛生兵を引率して着いたのは十三日の朝、直ちに本学病院の玄関、調理場、兵器製作所本館に臥している多数の被害者を見舞い一部検便にとりかかったものの、求められる治療で医療箱の材料はみるみる空になつた。十四日薬品を補充して同じく救護、十五日今の放射線学教室階下の一室ではじめて大学の幹部の方々におあいし、声涙下る古屋野教授の御話しに一同涙で和し大学の復興を堅く誓つた。

無残な教室の跡を訪れたのはそれから二、三日経つた後の夕方であつた。うづ高い凶書の灰の中に生花一束、内藤教授御遺骸のありし場所と察して佇立、御冥福を祈つた。温情誠心学問の化身とでも申すべき恩師、昭和七年京大助教授から御赴任以来猪突奔馬のようだった私の癖が出始めると無言で諭されお導き下さった内藤先生、万事控え目とは申せ事務に関せば決然同仁会の班長も引受けられる内藤教授、去る八月五日福岡の西部軍々医部でお目にかかったばかりの内藤教授、一転して御遺族のことなど。感慨は巡り夕色一入なのに気附かぬ程であつた。

髭の三谷君、男勝りの山田女史、勤続二十餘年その頃は助産婦として婦人科に勤めあの日負傷し経専内の仮設病院で死去された小川すいさん、原爆には先立つが鹿児島で戦死された元講師当時鹿児島医専教授の柴原義夫君、その他上田判夫、柳田義高君など戦没の各位、思い出は尽きない。

東亜風土病理学科担当の金子直教授も殉職された。私の研究室の副手才津芳雄君は勤務先女神検疫所から大学に向う途中、恐らく大学の極

めて近くで死亡されたと想像される。お隣りの衛生学教室では大倉教授、福田、内田両助教授がなくなられた。長大の基礎当時の支柱はもとより次代を担うべき方々まで全滅のうき目にあつたのである。

九月軍務を解かれた私は風研を、高橋助教授は細菌を、夫々一人ぼつりて再建第一歩に入つた。大村病院から諫早へ、その頃から復員の教室員も加わつて、洗濯場の風研、日本間の細菌は次第に活気づいてきた。長崎から諫早への通勤の途次遠心器を下げていつた当時の体力がしみじみ懐かしい。

二十二年の秋、私が細菌を担当することになり高橋助教授は風研に転ぜらる。間もなく待望の浦上復婦、すべてを復興の二字に集約してひたすら努めたその後数年、はりつめた気分を送る月日は早い。それにしてももう十年か。

(細菌学教室)

父を憶いて

内藤 久美子

何万燭光もの電球を一時に当てられた感じで工場の中は一瞬ピカッと光つた。次の瞬間、私は何が起つたのか、大きな工場の梁の下にうづくまつて居た。工場全体がぐしゃつと潰された感じだつた。然し何時壊れたのやら一時私は意識を消失して居たらしい。

「内藤さん出てこんね、内藤さん、内藤さん。」

との微用工員浦辺さんの声ではつとした私、のこゝと崩れた天井へ這上り何時もの避難所の裏山へと無我夢中でかけ上つた。

先程迄のギラ／＼した真夏の太陽は消え嵐の前の様に、被いかぶさつた墨色の空の下で血を流し、破れた衣服をまとつた。

人々の叫び!!べら／＼と赤くはげた皮膚の半裸のお母さんが泣き叫ぶ泣ん坊をしつかりと抱きしめて走つて居たのが今も眼前に浮んで来る。近くの大木は無残に根元から折れ、緑の葉は赤茶け、畠は一面荒れて了つて居た。さつき迄つや／＼したてりを見せいた茄子や胡瓜が全く焼けただれて精気を失つて居たのが実に不思議に思われた。

やつと腰を降した時、自分の顔にもづる／＼と生温い血が流れて居るのに始めて気が附いた。お友達の宅島さんが矢張り血みどろで、「痛い／＼」と泣いて居た。

此の山からはるか彼方の、確しか聖フランシスコ病院と思われる赤煉瓦の建物だけが目についた。あちこちで火がはじめて居た。

×

帰心矢の如く同じ工場の人達に「帰りたい／＼」と駄々をこねて帰宅への途を急いだ。汽車の線路を黙々と歩く。一面焼野ヶ原、遠く大学の建物が「まぼろし城」の如く何か異様にそびえて居た。

父の事がちらと脳裏をかすめたが、しかし私の心は其の時、只家へ帰りたいの一心だつた。

浦上球場の辺りでは熱くて／＼、附近の焼ける熱気で、今にも火傷しそうだつた。岩川町辺りへたどりついた。坂長の小父さんは「家も何も無か、皆んな死んで了つたとやろうか、僕はもう一度工場へ帰るけん」と云つて一人とぼ／＼と帰つて行つた。

製鋼所の裏の浦上川へ出てそのどろ／＼の川端を歩いた。赤肌の焼け

ただれた人々が（男か女かの区別も出来ない）“水ば” “水ば”と私達にせがんだ。

やつと幸町にたどりついた時、対岸に大浦天主堂が見えた。

あゝ私の家はある。母の所へ帰れる。とあの時の嬉しかった事。

×

“母ちゃん”と一言云つてばら／＼涙がこぼれた。

“もう明日からは行かんわ”と私は始めてそう云つた。その日迄毎日下痢をしようが、熱を出そうが“負けては大変”と大橋迄、下駄を歩いて行つた私だつたけれど。“父様はもつと大変でしょうネ教授会でも聞かれてるでしょう今夜は遅いわ”と母。

“大学の辺は何も無かつたよ”と私、母は此の私の言で始めて父の身を案じ出したのではなかつたらうか。一瞬の“ピカツ”で浦上方面に何が起つて居るのか、聾盲同様の通信状態だつたので、何も分からなかつたのでした。それから何時も特徴ある父の足音をどんなに待ちわびた事か。しかしあの足音を永久に聞く事が出来ないとは誰があの時考えたらうか。

×

その日から毎夜／＼防空壕で戦々恐々と夜を過した。

十日の夜警報解除で家へ帰つたら暗がりの玄関で靴が当つた。父!! かし父の靴ではなかつた。奥の八畳の蚊帳の中で誰かが寝ている。泥捧!! いや佐賀から家を案じて帰宅した兄だつた。

×

翌日から兄は各所の負傷者收容所、市役所、県庁へと走り廻つた。手懸りは全く得られなかつた。大学の上の穴弘法附近も、友達や私のピア

ノの先生方と共にかけづり廻つて探した。

ある日“穴弘法の山の上で内藤先生に会つた”と云つた人があるとの噂が這入り、それと勢い立つた。私はあの日から傷と以前からの下痢とを為殆んど臥床して居た。

三人共、然し、父が死んで了つて居られるなんて全く思つてもみなかつた。ひよつくり今日は、明日は帰つて来られると期待し続けて居た。

今日も一緒に探そうと弁当持ちで兄の友達の小川さんが来て下さつて居たが、重大放送があるとの事で正十二時ラジオの前へ集つた。何かさつぱり解らぬボソ／＼した雑音だらけの放送だつた。しかし敗戦と云う事は解つた。又その後阿南大将の自害の報も聞かれた。その日の午後、今は生理の助教授の尾崎先生が角帽を被つた学生さんで家へ尋ねて下さつた。

“先生の御遺骨がみつかりましたのでいらして下さい”と。

呆然とした。何んと云う事だ。あの父が逝つて了つたとは。

×

十六日の朝、母兄私の三人と知合いの小母様との四人で浦上へと向つた。破壊の街の中、人通りも少ない。憲兵が馬で通る。昨日の放送は“デマ”だとふれ廻つて居た。

浦上迄の遠路も少しも苦にならなかつた。一面の焼野ヶ原。此処ら辺りは何々のあつた所と話し合うのみ。

大学病院の坂で馬が悪臭を放つて倒れて居た。くさつて赤ぶくれて。緑色の全くない死の街。

レントゲン跡の詰所へたどりつく。古屋野学長と、お褒りなかつた佐

藤教授が忙しそうに走り廻つて居られた。古屋野先生も頰に傷をされて居た。高瀬教授に案内されてグルンドへ向う。

グビロが丘の辺りで、銅像の様に手足をにゆつと伸ばしたまゝ真赤にふくれた死体が異様に立つて居た。

沢山の死体を踏み越えて行くと恐怖も凄惨さも麻痺して、あゝ又かと思ふだけだつた。全くの廢墟。細菌教室の附近へ出る。此の間迄、木々の繁みに囲まれた象牙の塔は今も灰と泥だけの荒地と化して居た。

教授室の隣、図書室の部厚い灰の中の一体の骨が父のであるそうなの!! 全く実感が湧かぬ。用意した箱につめるだけ骨を入れた。これが父、いやそんな事はと、考えて始めて涙が出た。母の心中はどんなだつたらう。灰の本は字の跡を頁もその儘残してしかも完全に燃えて居た。

「一思いに亡くなられたかしら」と母。

「きつと此の本の下敷きになられた時私達の事考えなすつたわね、きつと父様の事だもの」と私。

あの母思い、子思いの父だつたもの、死の直前に意識があつたら私共の為にどうしても生きのびねばと思つて下さつたらうに。

×

あちこちの疎開地で油の燃える臭い。人の焼かれる臭いがその頃立ちこめて居た。今日は誰さんが○子さんを焼いてらつしやると話し合つた。

「父様は私達にあんな事させなくて済む様に灰になつてらしたのよ」と話した。一応お坊様も呼び、戒名も附けて貰つたが、しかし、まだ何か信じ切れぬ日々だつた。

ある一日、三人で再度スコツプを持ち浦上のグルンドの丘を訪れた。前にあつた男の人の死体はその儘の位置で鳥にでもつゝかれたのか目がくり出て居た。

父の死場所を掘り返した。父の持物と違うものが何も出て来ぬ様に願ひながら探したあげく、父の愛用の時計が出て来た。ガラスも針も壊われて――。時計、鍵、眼鏡の玉と次々に出てくる父の遺品、涙の中に掘り返しこれで父の死は確定的だと思いつゝも、いや、それでもまだ、奇蹟を願ひ夢みる三人だつた。

×

その頃の大学の教室員は殆んど出征して人員は全く少なかつた。病気で残つた人、女医さん等で父は責任感強く三日に一度位は当直として泊つて居た。真夜中に警報が出ると責任があると云つて一里程の道をゲートルを巻き、母の作つた防空頭巾や鉄かぶとを下げて出掛け、又解除になると家へ戻つた。行こうと云う希望者の少ない東京への連絡にも何度も出掛け、いつぞやは宿る所なく東京駅で仮睡しベンチから落ちて「目から火が出る」と云う事は本当だね」と笑つて居た父だつた。

八月八日の夜も当直として朝何時もの様に出掛けたりだつた。

八日の午後小使さんが用事で来て呉れその折父よりの手紙があつた。

「今日明日が危いそうだから善処する様に、何時も前へ逃げる事のみ考えていたけれど、後の方への事も考慮する様に」と。

後で聞くと角尾学長の広島見聞の報告もあつたそうだし、何かアメリカ機投下のピラによる、新型爆弾を投下するぞとの情報も這入つていたとか。しかし危険として教室を捨てる父ではなかつた。例え何かの用で教

室を離れて居て死を免れても、自責の念に、居ても立つても居られなかつたであろうし、凶書の灰に埋まつた学者らしい死は、父にふさわしい様にさえ思える。

その朝細菌に出入りしていられた学生の和泉さんと云う方が、父に、牛乳と桃を届けて下さつたとか。父が死出の水にそれを食べたのだろうか。私共に珍らしいから持つて帰つてやらうと、取つていらしたのではあるまいか。母は毎年の命日に必ず桃を靈前に供えている。

X

父に叱られた記憶は少ない、余程の事でない限り。しかし曲つた事は徹底的に嫌つて居た。機嫌の悪い父を見た事がない。何時も麥らぬ温容だつた。頭は祖父ゆづりですつかりはげて老けて見えたが、つや／＼した顔色は働き盛りを示して居た。暇があると二階の書齋で、横文字の本を拵げて居た。しかし一家の団葉は大好きで食事後は、皆それ／＼一日の事を話し合い父も又色々話しをしてくれた。

原子物理の初歩の電子や陽子の事を教えて呉れたのも父だつた。私の質問を喜ぶ父だつた。日曜日等よく一家四人で郊外のおちこちへ散策した。楽しい思出はつきない。

父は何時も「人間の顔は心掛けと教養で美しくなる。どんなに不細工でも理智のひらめきの表れた顔程美しい物はない」と云つて居た。

私の将来を案じて呉れた言葉であつたらうか。

夜の食事の用意が出来て、皆で父の帰りを待つた。電車の音を聞きつつ此の電車、次の電車とよく兄と云い合つた。特徴ある心持ち片方に重心が傾いた様な足音に兄と二人玄関へ飛んで出た。酷暑には、冷蔵庫に

手拭を入れて、帰つた父の頭にのせて上げるのが得意だつた。温容をほころばして喜んでくれる父であつたから。

その後私は父が居られないからとて、変る事があつてはと、一心に勉強した。

多くの方々の御好意で此処迄やつとたどりつたものの父の御護りあつての事と、入学、卒業時、父の大阪のお墓に報告し大学卒業の日グビロが丘に立つて、やつとこれ迄父のお守りと母の苦勞でたどりつきましたと報告した。三人それ／＼アルバイトし苦しい時期もあつたが、此の地に住つて居た為か、父の知人の方々の大きな／＼御好意に包まれ甘えてここ迄來得た私共だつた。しかし父が若し生きていてくれたらと如何に思つた事か。父亡き後、私共二人を黙々と育てあげてくれた理解ある母に、孝養をつくす事のみ私共に残された義務であり、父への孝養とも思うのに、心配のかけ通しとは何んと親不孝の極みであらう。

(昭和三十年八月記 笹島内科勤務)